

序

肺がん薬物療法の進歩は目覚ましく、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬の導入によって治療選択肢は大きく広がった。一方で、薬物療法の実践は単にレジメンを選択するだけでは成り立たない。患者の併存疾患、臓器予備能、副作用、合併症、さらには治療継続性や生活背景までを踏まえ、最適な治療強度とマネジメントを検討する必要がある。臨床現場の意思決定はますます複雑化している。本書は、肺がん薬物療法を「実装する際の困りごと」に焦点を当て、標準治療の解説に留まらず、エビデンスの乏しい領域や難症例、副作用への対応、併存症を抱える患者への工夫といった、教科書だけでは学びにくい知見を体系化することを目的とした。

肺がん診療に携わる医師の裾野は広がり、呼吸器内科・腫瘍内科のみならず、呼吸器外科や他領域の臨床医も薬物療法に関わる機会が増えている。そうした多様な読者に対して、実践的な視点から治療戦略を整理し、意思決定の引き出しを増やすことは喫緊の課題と考えられる。とりわけ、副作用・併存症のマネジメントは教える機会が限られながらも診療の質を大きく左右し、患者アウトカムに直結する要素である。最新ガイドラインや臨床試験の結果に基づきつつ、現場の経験知を言語化することは、若手医師の育成にも寄与するであろう。

本書の特徴は、難症例に対する考え方や周辺情報を豊富に取りあげた点にある。また、情報の変化が速い領域に対しては適宜更新できる仕組みを用意し、知識を継続的にアップデートすることを意図した。肺がん薬物療法に携わる読者が、目の前の患者をよりよく支えるための実践知を獲得し、診療の質が一段高くなることを願って本書を刊行する。

2026年1月

岐阜大学大学院医学系研究科 呼吸器内科学分野
津端由佳里